

水無みよう

第12号

東地区地域づくり協議会々報
発行 平成26年8月15日
発行責任者 佐藤成孝
茗荷沢268番地1 (東開発センター)
電話 025-779-3312

川をより 身近に

赤石・三用両小学校と「水無水系守る会」が今年、当協議会々員になった。一守る会々長高野芳輝さんに聞いた。



高野芳輝さん(62)

§ 新潟福島豪雨から

—「水無水系守る会」はどんな経過で設立されたのでしょうか。

高野 平成20年7月27日新潟・福島豪雨のとき、濁流が水無橋の橋桁に達していた。私の集落黒土が流されると思った、それから川を考えた。個人で何か出来ないけれど、でも災害が起きてから対応しても遅いので何とかしなければと思うようになった—というのが個人としての経過です。

その後上流に砂防堰堤群の建設計画が示され「魚沼漁協東分会」として対応判断をしなければならぬ場面が出て来たのですが、仕事を持ち忙しい役員には負担が大きいの、平成23年の漁協東分会総会で「別組織を作り砂防工事の交渉はそれに付託する」ことになり、その別組織が一守る会です。会は先頃急死した上村清会長の強い指導力で進んできました。副会長が私だったため急遽後任会長になりましたが上村さんの力を改めて感じています。会の目的は次の4項目です。

- 水系とは三用川も含むという意味
- 水無川と三用川を再生させる
- 地域の安全安心と川に魚が棲めるようにする
- 次世代に自然を残す

§ 交渉の過程で気が付いた事

—「一守る会」はどのような活動をして来たのですか。

高野 会の目的を一読すると堅い感じを受けるかもしれませんが、そうではないんです。素朴な疑問にたって交渉をしてきました。「上流に堰堤を作るより狭隘部の水無橋付近の拡幅と低床化が先ではないか」「堰堤をどんなにつくっても土砂は出るのではないか、とすれば既存堰堤や河床を浚渫すれば対費用効果が一番高くなるだろう」などです。

そういう過程で気が付いたというか勉強になったのは、治水は信濃川河口が大河津分水河口まで一体なんですね。「登川、三国川、水無川、破間川」はびくともしなかったが、信濃川長岡地点が大氾濫ではいけません。浚渫にしてもそう遠くに土砂を運ばせし、地権や管理などそう簡単なことではないんですね、すべてが。

§ 強い護岸や川に石の配置

—交渉の当事者として行政は「一守る会」をどう受け止めたのでしょうか。またこの間にどのような事が実現しましたか。

高野 行政はこうした私たちのような住民に対し丁寧を装いながら内心は馬鹿にするケースがありますが、湯沢砂防を始め、誠実さを感じさせるものでした。上村清さんの川への思いを



理解して下さったということでしょう。魚沼漁協東分会から交渉を付託されていたことや地域集落の要望を合わせ伝えたことも大きかったですね。

根次工事をして頂き護岸が強くなりました。川に大きな石を配置し昔の面影が蘇りました。堂島・黒土共有地を埋め立て広場ができ拡張されつつあります。黒土集落と川の間にあった広い堀を埋めて頂き、より集落の安全性が高まりました。求めても行政が応えてくれなければ出来ない事ですし、私たちが交渉したからすべて実現したと思うほど自惚れてもいません。ただ上村清さんとしょっちゅう湯沢砂防を訪ね交渉したことがそれなりに影響したという話をしてもらえると嬉しいです。それ以上遠慮すれば上村清さんの熱意に申し分け無いですよ。

§ 遠くなる川、だからこそ

—御尽力には頭が下がりますが、魚影、水中生物、石緑、景観、すべて薄くなり川は人から遠くなるばかりではないですか。

高野 雷土新田有志が先頃「かんねんぼり」という地域のすばらしい記録誌をまとめ出版しました。その中に東中学同級生の桑原秀雄さんが幼少年時三用川で魚とりなどに熱中した体験が多くの紙面を割き掲載されています。私の幼少年時の水無川の記憶と

連日大勢が遊ぶ水無川写真上

全く一緒です。川は豊かでした。確かに魚や水中生物は当時とは比べられない程です。

それでも石を配置したふれあい広場地点の川には夏休み連日東京から六日町に来た親子が数十人来ています。川が本当は好きなんですね。深みを作ったところには魚の餌になるウスバカゲロウがたくさんいるようになりました。多くの人が川に来れば川や景観、治水を考えるようになるでしょう。

8月17日には堂島地内ふれあい広場で「第3回 水無川ふれあい祭」をします。多くの人から川にふれて頂きたい、多くの人達どうしがふれあって地域を賑やかに楽しいものにしたい、そんな思いで準備をしています。

(7月29日聞き手 関正太郎)

芋赤・門前 に追加114万

芋赤洗い越修繕工事32万円と門前土砂流出対策82万円が1次追加配分で決まった(7月1日市から決定通知)

直売交流など1,120万

当協議会が事業実施主体になり今年「過疎集落等自立再生対策事業」に取り組む。

1 農業体験交流 2 歴史展・文化祭 3 地元産直売交流—に取り組む。総事業費は約1,120万円、内補助金1,000万円。単年度のみ。

(上記はいずれも7月30日の役員会で報告承認された)